

審査の結果の要旨

氏名 徐蘇斌

本論文は、20世紀初頭から建国初期における、中国の都市・建築の近代化過程と日本との関係を歴史的に解明しようとするものである。日中における都市・建築の近代化過程と相互の関係性は、その時期によって異なり、同じ時期でも多面性を有している。本論文では、清末・民国、さらに建国初期の順に、各時期における日中関係を読み取る上で重要な断面を考察している。また、そこに通底する論者の問題意識は、従来の研究で無視、あるいは看過されてきた傾向がある。-外来の影響に伴う「受容」「反受容」と「ナショナリズム」という2つの側面からの考察にあり、中国における都市・建築の近代化過程を探る上での前提と考えられている。

第Ⅰ章は、中国における「近代建築」という概念の定義に関する基礎的研究である。本章では、古代から近代への建築認識の変化に焦点を置いている。清朝期に編纂された一大古典知識体系である『四庫全書』を取り上げ、中国古代においては、独立した分類としての「建築」は存在せず、建築を「典章制度」の一部として認識されていたことを跡づけている。一方、日本の影響を受けて作成された京師大学堂章程に「建築学」の設置が見られるが、ここにはじめて、建築という概念が工学の一部として認識されるようになったことを指摘している。この過程を通じて、近代建築学というジャンルの再編成に至る変換点を明らかにしている。

第Ⅱ章は、清末における中国の鉄道建設と日本との関係に関する考察である。鉄道建設は全国的規模で行われたが、近代国家建設における最も重要な社会基盤整備事業である。清末期は、中国における都市建設の黎明期であり、鉄道の開通によって、都市の建設と繁栄を招いている。

本章では、中国人を主体にして計画された鉄道建設を対象に、清末・民国初期において日本人技術者が関与した、福建省の鉄道建設をはじめ、関内外鉄道、粵漢鉄道、湖北鉄道における具体的内容を明らかにするとともに、中国の鉄道建設とその自立過程における外国人技術者の功罪について歴史的に位置づけている。

第Ⅲ章は、清末における勸業博覧会の「受容」に関する研究である。具体的には、清末期の中国における勸業博覧会の受容とその変容過程を通じて、中国近代の都市空間の再編成、ならびに

その空間の「公共性」に着目している。

中国の近代化において、20世紀最初期の数年間は、工商振興、およびそれに伴う都市空間の変容過程において、重要な画期をなす一時期と言える。清末の行政改革と商工振興の施策はこの時期に形作られ、それとともに都市空間の変容が見られることを指摘している。そこでは外国の影響は無視できないが、とりわけ、1903年に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会は直接的に中国に影響を与えていたことを明らかにし、中国の都市空間と日本との関係について新たな視点を提供している。

第IV章は、中国人技術者層の誕生とその養成に焦点を当て、戦前期における中国人工学系留学生、特に建築系留学生の事績についての歴史的考察である。

本章では、工学系留学生を対象として、各種関係名簿をはじめ、人名辞典、当該関係資料等の収集・分析を行い、日本留学の最初期から1945年までの半世紀における留学生の個人データ(約2,000件)を作成し、これに基づいて、戦前期工学系留学生の輪廓を描いている。

さらに、工学系留学者が最も多かった東京高等工業学校の建築科を例に、留学生の日本での就学状況、帰国後の勤務状況などを考察している。また、残された卒業論文などから、留学生の建築観における日本の影響を明らかにしている。

第V章は現代建築を導入した代表人物・柳士英についての研究である。柳士英は中国文化大革命以前に湖南大学副学長の立場にあった人物である。彼は1920年東京高等工業学校建築科を卒業し、その後、中国における近代建築教育や、新建築の導入などに大きな貢献を果たした。

本章では、中国新建築の萌芽期における新文化運動との関係、さらに建国初期における民族主義形式と新建築との関係など、新建築の興隆と崩壊についての諸問題について、柳士英の事績という一側面から明らかにしている。

第VI・VII章は、近代中国建築史学の興隆に焦点を当て、日本と中国における代表的な建築史学の先駆者を対象にして、日中における建築史学の内在的関連性、及び比較に関する考察を行っている。

第VI章では、日本近代を代表する東洋建築史家・関野貞の中国調査を記した「関野調査帖」を中心にして、関野貞の中国調査の全容の復原作業を行い、さらに、彼の問題意識、方法論、調査内容及び中国社会との関連などを明らかにしている。第VII章では、中国建築史学の開拓者・劉敦楨について考察している。劉敦楨は日本留学の経験を持ち、日本における東洋建築史学研究の成果を踏まえながら、中国人による自立した中国建築史学を開拓した先駆者である。本章では、劉

敦楨の足跡を通して中国建築史学の形成過程を跡づけている。

第Ⅷ章は、解放後、目覚ましい活躍をした建築家・趙冬日を取り上げ、社会主義体制後の中国における活動の具体的内容を考察し、中国現代建築の成立基盤について重要な側面を明らかにしている。

以上、本研究では、20世紀初頭から建国初期における、中国の都市・建築の近代化過程と日本との関係を解明するため、8つの重要な断面の分析がなされた。従来までの単一な当該問題の捉え方から、大きな一歩を踏み出したものであり、さらに実証性に富んだ大部の内容となっている。今後の比較都市・建築史研究における新しい展望を拓いた労作と言えよう。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。